図書館長の

おもちゃ箱 5

絵葉書の年代判定と映画

樋口 穣



本誌236号のテーマが「“映画” ですよ」と伝えられた時、これはちょっと合わせるのがむつかしいな、と感じました。四条通をゆっくり東から西に向かって時空散策してきたわけですが、Web版「図書館長のおもちゃ箱」のほうも歩みが遅々としていて、未だ四条大橋を渡れていません。この分では到底歩きとおすことができないんじゃないかと、やや絶望的になりつつあるときでしたから。しかし、悩んでいる時間はありません。

幸いなことに、かつて私はFacebook（Fb）で個人的に京都の古絵葉書にかんする話を公開していたことがありました。Fbでの公開は使い方次第ではけっこう役に立つもので、さまざまな方から即座に反応や情報が入ってくるのは有り難いことです。そんな原稿の中に、新京極について触れたものがありました。今回はそれを踏み台に、四条通からちょっとだけわき道にそれることにいたしましょう。

今回とりあげるのは京都新京極の古絵葉書。たとえばこの一葉をゼミの課題にしてみてはどうでしょうか。何の説明もつけずに学生に配付して、この写真から判ることを調べ上げさせる。もし実施されたなら、皆さんはどんな情報を読み取り、どのような調べを行われるでしょうか。まずはこの絵葉書のもとになった写真の撮影された時期がいつごろか、特定できますか。今回はこの点を重点に追究してみましょう。絵葉書には、その時々の郵便法に従って宛名面に特徴があり、宛名と文面の境界線の位置や、「郵便ハガキ」か「きかは便郵」か「きがは便郵」というぐあいに頭に書かれている表示も時期により異なります。これによっておおよその発行時期が判ります。これについてはWeb版図書館長のおもちゃ箱「四条通今昔散歩」の１回目にやや詳しく紹介しています（https://www.kufs.ac.jp/toshokan/calendar/2021/director1.html）。ただ、これはあくまで簡易な判定の手がかりに過ぎません。この絵葉書の場合、文面境界線は表面の下部ほぼ３分の１の位置にあり、頭には右書きで「きかは便郵」となっており、これだけで判別すれば、明治末から大正前期の特徴を持っています。しかし、これだけをもって、この絵葉書が大正前期以前の様子を撮影したものとは言い切れないのです。郵便法が改訂されたにもかかわらず、古い原版で宛名面を印

刷したものもないとは言えないからです。そうなるとやはり、写真面に写っているモノから撮影時期を判断しなければなりません。通りの東西にならぶ商店の看板なども、ある程度の時代判定には役立つかも知れませんが、１年や２年で入れ替わるものでもなく、大雑把な時期の把握にしか役立ちません（もちろん、それぞれの店や映画館の盛衰を調べるのも面白いですが）。

さて、この写真の場合、何と言っても大きな手がかりになるのは映画館の「近日上映　シーホーク」の看板でしょう。さあ、今となっては相当な映画マニアでないと判らないかもしれませんが、原題はThe Sea Hawk。マイケル・カーティス監督、ハワード・コッチ、シートン・ミラー脚本のアドベンチャー映画。

ビング・クロスビーの「ホワイト・クリスマス」を知る人は多いでしょう。あのサンタ帽をかぶって陽気な笑顔を見せるレコードジャケットは、昭和生まれの人にとってはクリスマス定番だったものですね。クロスビーとホワイト・クリスマスを有名にしたのがクロスビー、フレッド・アステアの黄金コンビ共演のミュージカル映画「スイング・ホテル」（1942米　日本公開1947）ですが、そのリメイク版が1954年にクロスビー、ダニー・ケイ（クレイジー・キャッツの谷啓の名前のもとになった）コンビでヒットした「ホワイト・クリスマス」でした。長くなりましたが、このリメイク版の監督が、カーティスです。ほー、そんな映画を作った監督ですか、って？はい、ほかにも多くの娯楽作品を監督しています。

宮崎駿監督の「紅の豚」（1992）にカーチス複葉水上機を駆ってさっそうと登場するドナルド・カーチスはやがて映画俳優になりますね。自ら監督、プロデュースした映画「Triple Love」のポスターが映画の終わりごろに登場します。そのポスターには幾重にも宮崎流の仕掛けがあって、実際に制作され上映されたアメリカ映画「WAR ARROW」」（ジョージ・シャーマン監督 1956）のポスターを下敷きにしていることはファンの知るところですが、ドナルド・カーチスの名には、その乗機とのかかわりだけではなく、映画界の監督の名前との絡みもあるのかもしれません（表記カーチスは映画の設定による）。ところで、シーホークの主演男優はエロール・フリン。タスメニアンです。波乱の青年期を送ったのち映画の世界に。アクションスターとして活躍しましたが少女好きの嗜好からたびたび事件やスキャンダルを起こし、殺人容疑での逮捕経験もある異色の男優でした。まあ、主演作品には名作と言えるほどのものは少ないですね。最近では マーティン・スコセッシ監督の『アビエイター』（2004年公開）でジュード・ロウがエロール・フリンを演じていました。

シーホーク脚本のハワード・コッチといえば、ヒコーキ好きがスグに思いつくのは「633爆撃隊」（1964原題633 SQUADRON）‼ 当時まだ飛行可能状態で現存していた木製双発戦闘爆撃機、デハビラント・モスキートが画面狭しと飛び回るマニア大感激の映画でした。対空機銃の激しい迎撃砲火をかいくぐり、狭い渓谷の奥の目標をピンポイントで爆撃するシーンは、ジョージ・ルーカスに深い感銘を与えました。それが映画「スター・ウォーズ（エピソード４、1977）」のデススター攻撃の場面の原点となりました。興味のある方はレンタル・ビデオ店へどうぞ。

あれ？…なんでこんな話をしているのでしたっけ…？

そうそう、新京極の絵葉書でしたね。このシーホークが制作されたのが1940年。日本での公開が1941年正月ですから、画面右端の看板「近日上映」ということからするに、この絵葉書の写真が撮影されたのは、道行く人々の冬着姿を合わせて判断すると、1940年の晩秋から暮れあたりと言うことになります。さらに、この絵葉書右手前に見える平野楽器東店は1941年に別の店にかわっていることも別の資料から確認されており、この予想を補強してくれます。このように撮影年が判明する写真は、絵葉書では結構少ないので、新京極を撮影した絵葉書年代判定の “基準作” として貴重な資料になるわけです。

私が高校生のころまでは、京都キネマ倶楽部は菊映（1942年５月に菊水映画劇場と改称）として続いており、その北には弥生座、テアトル72、その先にも映画館が何館も軒を連ねていました。新京極通りを挟んで西向かいにはコマ劇場、少し北にはピカデリー京都という具合、もう少し前ならスケートリンクやボーリング場などもあり、新京極にはまだ、明治発祥以来の歓楽街の名残が濃厚でした。

さて、この絵葉書、まだまだお話ししたいネタは多いのですが、映画にからめて寄り道をしすぎました。今回はここまでといたしましょう。

それではみなさん、また次回、誌上でお会いしましょう。さよなら、さよなら、さよなら……

ひぐち　じょう（教授・日本文化史）

図書館ホームページにも関連情報が掲載されています。ご参照下さい。